

支配からの離脱

—「浮城」の意味するもの—

堀 黎 美*

FREEDOM FROM OPPRESSION

“What is meant by ‘Fu cheng’ (Floting Town)”

Reimi HORI

Japan recently seems to take a narrow view of an industrial development in coastal regions of China as a result of attaching too much importance only to the expansion of its economic interest.

There are some voices saying, “Chinese government overcame the Tien An Men incident in 1989. The measure was inevitably taken by the government at that point of time.”

Differentials in economic development (e.g. emerging of many jobless and homeless inland farm workers called ‘blind stream’), corruption of leaders, expatriation of young people –such problems are still left unsolved, with none of trauma in the mind of people unhealed resulting in less and less trust in the government.

What will become of Chinese people, if they lose centripetal force because of growing mutual distrust? The novel “Fu cheng” or “Floating Town” can be considered as depicting the despair of people to the tomorrow of China. Let us think about the apprehensions felt by sensible Chinese about the past and future of the country focussing upon the novel by Liang Xiaosheng.

はじめに

近頃日本に於ける論調で気にかかることの一つに、中国に対する経済的権益の拡大のみを重視するせいか、沿海地方の発展ぶりだけを視野に入れ、「中国政府は’89天安門事件を乗り切った。あの時点では、中国政府のとった措置も止むを得なかった」との意見さえ耳にするのであるが、果してそうであろうか。たしかに沿海地方の経済発展ぶりは目を驚かすし、庶民の生活水準も向上しているが、一方、内陸部との格差、たとえば盲流と呼ばれる、内陸部の食いつめ流浪する農民の大量発生や、各地の幹部の腐敗、青年達の国外脱出など、89年当時問題となっていたはずみ

* 教養部

はますます増大し、心の傷は癒されないまま、政府に対する信頼はうすらぐばかりである。

求心力を失った中国人が、このまま相互不信を募らせていけばどうなるのか、小説“浮城”（浮市の意）は、中国の明日に対する、文革世代の作者の絶望を描いた作品と思われるが、心ある中国人自身の中国の明日への憂慮を、“浮城”を中心に梁曉声の作品から見てみたい。

一.

浮城（梁 曉声著 原文約38万5千字）

暴風雨の荒れ狂ったある夜、中国沿海の某市が、人々の気づかぬ間に大陸から切り離され、太平洋上にさまよい出た。翌朝、四方を海に囲まれている自分達を発見し、人々は世界の終りが到来したかとの恐怖で混乱に陥いる。

無数の鴟達も自らの種の生存を賭けて人間に襲いかかり、激烈な争いが展開されるが、人間が勝利をおさめ、鴟達は皆殺しにされる。浮市は日本に向っているらしいことが分り、費用をかけずに日本に行くことができ、上陸したら皿洗いで働いて金持になれると大喜びする者、どこへ行っても自分達はあくまで中国人なのだから、中国人としての尊厳を守ろうとする者、かくなる上は新しい理想国の建設をと叫ぶ者などに分裂し、武力闘争に発展する。その間またまた大暴風雨が襲来して、多数の死者を出すとともに浮市は廃墟と化し、すべての機能が奪われ、残った人々は本能をむき出しにしていかがみ合う。

やがて日本に接近したが、日本は海上に氷の長城をめぐらせて浮市を寄せつけず、ただ、世界各国からの非難を恐れ、水、食料、医薬品など、ヘリコプターで投下する。

氷の長城のへりに添ってただよっていた浮市は、日本を離れどうやらアメリカに向うらしい。日本よりアメリカの方がずっとよい、と人々の喜びは一層大きくなり、皆の期待に応えるかのように、行手に星条旗と自由の女神が出現するが、それは蜃気楼でしかなかった。浮市は遂に太平洋に没してしまい、その夜ブッシュ大統領は数日間の心配から解放され、熟睡の夢の中で——神はアメリカを救い給うた。中国人どもめが——と呟やく。

38万5千余字に及ぶこの小説には、当然多数の登場人物がいるが、強いて主人公——というより、話の筋をつないでいく役割を、比較的多く荷っている人物をあげると、市長、市長とは奇縁で結ばれた馬国祥、娼婦の婉児の三人になるが、三人とも順次悲惨な死に方をする。もちろん浮市自体が最終的に海中に没してしまうが、それ以前に日本と中国の船に救われたごく少数の人間を除き、登場人物はほぼ死ぬという、不思議な、救いのない小説である。その救いのなさは後述するとして、前記の三人の末路について記しておく、

人口二百万のこの市が、大陸から切り離され海中にただよい、鴟との死力を盡した闘いに打ち勝ち、側近の進言により、テレビを通じて市民に落ち着くように呼びかけたあと帰宅した市長は、妻が発狂しているのに気づき、翌朝信頼している友人の馬国祥を呼び出し、自分の留守中妻を看護するよう依頼し、陣頭指揮を取るため市政府に戻っていくのだが、そうこうする間に過激派に

拉置監禁され、再度の台風襲来によるその建物の崩壊で脱出不可能となり自殺する。

馬国祥は、約束通り自分の妻と娘をつれて、市長の叔父になりすまして市長官舎に行くが、市長夫人は狂っている様子は全然なく、市長の娘には怪しまれながらもこの母娘を守り続け、市の崩壊後、暴徒達に自分の妻を殺され、止むなく皆で海にとび込み、市長夫人と娘、自分の娘は日本の船に助けられるが、本人は鮫の餌食になって死ぬ。

婉児は自墮落に暮している娘である。かつてたまたま教会に行ったことがあり、神父の話を聞いているうちに神とセックスしたらどうだろうと考え、自分でも恥かしくなりそれきりでいたが、その後、街で神父と行き遭った時に、神父の持っていたネットに入ったすっぽんが、彼女のスカートに噛みついて放さないという事件があり、神父に「お前は淫らな女で、お祈りの最中にも神を冒瀆することを考えている」と公衆の面前で罵倒され、神父が祈るとすっぽんがやっとなスカートを放す奇蹟が起って、それが新聞にのったため有名になり、皆に嘲笑されている。しかし心根は優しい娘で、自分をただ一人可愛がってくれた食堂の経営者の依頼で、彼の娘を探しに市に出てきたところで、知らない夫婦の喧嘩のまきぞえで、あわやという時若い男に助けられ、一緒に鴟と闘い、過去に新婚の妻と親友に騙され、人間不信に陥っていたその男と次第に打ちとけ、一夜を共にし、今後何とか二人で力を合わせて血路を開こうと誓い合う。だが、婉児がやっとな探し出した食堂経営者の娘の夫に、持金を狙われて青年が殺されてしまい、その仇討ちで彼を殺し、再び居所を失ってまた街をさまよううちに、荒みきった男達に輪姦されて気が狂う。市が沈む直前、やっとなやってきた中国の軍艦に助けられるが、軍艦が積載量を超過し「そのデブを一人降ろせ！」と叫んでいる声を聞いた一瞬正気を取り戻し、デブのかわりにそっと海にとび込む。こうして市が海中に没する前に、主要な登場人物は全部死に、二百万市民のうち、救助された少数の人物中読者が知っているのは、市長夫人とその娘、馬国祥の娘、食堂経営者の娘、の四人だけとなる。

二.

作者はこの小説で何を訴えたいのであろうか。

一読して感じたのは、①納得しがたい個所が多々あること。②文体が非常に読みにくいことであつた。まず①に関していくつか例を挙げると、④。地核から切り離されて、人口二百万もの市が海中にプカプカ浮くか？の可否は、小説のジャンルにかかわってくるから問わないにしても、運命共同体となった人々の相互不信にまず驚かされる。非常事態になった時、人々のエゴがむき出しになる可能性は、理解できない訳ではないが、この市には空港があり、飛行機も何機かあつたのだが、市民はまずその飛行機を焼打ちしてしまう。つまり市民全員が乗ることができない以上、少数の者だけ助かる可能性を残すことは許せないのである。このことはまた、このような事態にはまず権力者がこの飛行機に乗るのが暗黙の了解になっていることを示している。市民は置き去り、棄民されることを本能的に感じて焼打ちに走ったと考えられる。子どもや病人をまず安全な所に移そうという視点はない。

同じように、浮市が日本に接近し、華僑の青年がヘリコプターでメッセージを持って来た時も、

引きずり降して殺してしまう。安全な所に帰れる同国人が許せないのだ。⑧。市長——個人というより、行政担当者があまりにも無策である。いくら非常事態に動員し、鷗の襲撃と闘うのに忙殺されたとしても、市が機能している間に、あらゆる方法で本国はじめ近隣諸国に SOS を発信し、水、食料などの備蓄を調べさせて市民に告げ、命令系統を明確に徹底させるなどの手を打てば、市民はもう少し秩序だった行動をとることができ、混乱は避けられるのに、そのような行動は一切行われぬ。特に変だと思うのは、市長が誘拐され、閉じこめられた建物が倒壊して、生還が不可能になったところへ、市長の警備隊長が方法を講じて探し当て訪れるのだが、市長はこの警備隊長に「後は君にまかせる、頼んだぞ」と言い遺して、過激派が差し入れてくれた手榴弾で自爆してしまうのだが、いくら非常事態とはいえ、そういう形で権限移譲が行われるのはいかにも中国的だ。この警備隊長も、自殺をはかって海中にとび込んだにもかかわらず「助けて、助けて」と叫ぶ母子を救おうとして、ほどなく溺死して、その後この市は統率者が全く居なくなる。⑨。数日間海中にただよっている二百万都市に、本国から何の連絡もないのは考えられない。かなり日が経ってアメリカ近海で市自体が海中に没する直前、本国の軍艦が数隻現れるのみだ。⑩。浮市の人々にとって、外国は日本とアメリカ以外、韓国もロシアもないらしい。浮市は、まずは日本の九州沿岸をかすめるのだが、高度に科学が発達した日本は、海上に厚い氷の長城をめぐらせて浮市を寄せつけない。九州や四国の住民は大恐慌を来し、本州に殺到する。しかし日本は世界の非難を恐れて、ヘリコプターで救援物資は投下する。

このあたりは、中国人の日本人に対する屈折した感情がうかがわれる所であるけれども、海は大陸の人にとって身近な存在でない故か、作者の偏見と思える。海は日本人にとっては命綱であるから、どのように高度に科学が発達したとしても、氷の長城をめぐらし、生態系に影響を及ぼす如き方法は、日本人がとるはずはない。そして日本が救援物資を投下するのを、世界の非難を恐れた結果と書いているのは、日本人はエゴイストで、けちで、冷めたいと見ている、中国人の一つの見方ではあろう。

三.

文体の読みにくさについては奇異な感じがする。この作者の作品はすでに何篇か読んでおり、決して読みにくい文体ではなかったため、その変化に疑問を覚えた。ここで作者及び他の作品について若干触れ、浮城と比較してみたい。

梁 曉声

1949年 黒龍江省ハルピン生れ。

1968年－74年 同省北大荒に下放。

1974年－77年 復旦大学中文系卒業。卒業後北京電影（映画）に所属。

1979年－処女作を発表。その後活発な作家活動を行いつつ現在に至る。

作品中《這是一片神奇的土地》が82年全国優秀短篇小説賞受賞。《父親》が84年同賞受賞。

《今夜有暴風雪》 全国第三回（83－84）優秀中篇小説賞受賞。その他数篇が英訳されるなど、

中堅作家としての地歩を固めている。作者は自分の創作三原則を「平和主義，人道精神，平民思想におく」と述べ、また、十九世紀の文学を特に愛好し、西方現代文学諸流派（超現実主義，ブラックユーモア，荒誕派，意識の流れ，等々）に興味はもつが，それらは十九世紀の文学を超えてはいないと見ている。中国現代文学に対しては，「まさに新しい発展期にあり，前途は疑いなく光明に充ちている。ただしこの前途は，中国の一代あるいは数代にわたる作家の努力にかかっている。中国文学に目下欠けているのは，時代に対する批判の予先である……」（当代中国作家百人伝より）といっているが，この発言は，同書89年6月第一版に述べられているものなので，（すなわち'89天安門事件以前に出版された本であり，天安門事件を境に文芸界に対する政策の大変化があったため）現在も作者が同じ考えを持ち続けているかどうかは，大いに疑問である。

浮城と比較するため，過去に受賞した上記三作を年代順に紹介する。

這是一片神奇的土地（約2万2千字）

北大荒に下放して三年目の冬，食糧難の解決のため私達の連隊の十数名は，開墾先遣小隊を組織し，鬼沼と呼ばれて数多の伝説に包まれている底無し沼の征服に向った。先遣隊は男勝りで美貌の副指導員李曉燕，オセロに似ているのでムーア人と呼ばれている王志剛，私および妹（さき頃，中絶手術を受けるという不名誉な事件を起したため，監督できるよう私の隊に呼び戻した）が含まれていた。ムーア人は副指導員に心を寄せており，同じ気持の私は彼に嫉妬していた。李曉燕は上海バレエ学校の優秀な学生で，引く手あまたの身にもかかわらず，自分で志願し労働のため北大荒にやってきたが，三年の労働を経ても白樺の若木の如き容貌体型は変わらず，最初の年に班長，二年目に入党，三年目には副指導員に任命され，全団の模範であった。三年目の夏のある日，スケッチをしようと川のほとりに出向いた私は，当時は禁止されていた柔かい歌曲を口ずさみながら，ひとりで踊っている彼女を見つけて驚く。彼女も狼狽し，洗濯していただけたと強弁する。「嘘つき」といいたいのをこらえて背を向けた私に「隊に報告するの？」と不安そうな問いかけがあり，私は否定する。

母重態の知らせを受け休暇を申請するが，本気にしない隊は許可せず，止むなく無断で隊を離れ帰宅した私は，母のこの世における最後の五日間，最大限の孝養を盡くし，妹の面倒を見ることを誓った。葬儀を終え，悲しみを抱いて帰隊した私を待っていたのは，共産主義青年団除籍処分だったが，李曉燕の同情と思いやりで救われ，彼女と心の通じ合うのを感じる。

冬が過ぎ，先遣隊が新しく開墾した沃土も緑に覆われる頃，李曉燕が倒れた。二日間，意識不明中のうわ言にも麦蒔きを案じている。三日目，やや持ち直した彼女は妹に食糧の残りを訊ね，皆に隊に戻るよう命じ，彼女とムーア人，私と妹を残し，全員帰隊し応援隊を依頼することになる。食糧が底をつきかけ，炊事係の妹は，私とムーア人の制止を聞かず小さなノロジカを追いかけて行き，私達の眼前で底なし沼に足をとられ沈んでしまう。妹の最後の叫び声は「兄さん、来ないで……」だった。必死で押し止めるムーア人を私は恨み，なぐりかかるが，「李曉燕を愛する権利はおれにもあるんだぞ」とのムーア人の言葉にうなだれるほかなかった。

ムーア人はそのまま出かけて行き、近くを通りかかった猟師から馬を借りて戻り、意識不明の李曉燕を医者に見せるよう、私は急き立てるのだった。「おれは重いし、彼女と二人をこの馬の力では耐えきれないから」と。しかし全力を出しきった馬は途中で倒れ、李曉燕も「私が死んだら、あなたの妹のそばに埋めて。名前の上に開墾者と刻んで……」と言い遺し、馬ともども息絶える。私が彼女を背負って歩き出した時、応援隊が近づいてくる音が聞こえてくる。ひとり残ったムーア人は狼と闘い三匹倒したが、血まみれの彼の服が残されているだけだった。

あくる年、鬼沼は遂にわれわれに征服された。「開墾者王志剛、李曉燕、梁珊珊」の墓に私が報告しに行った時、妹が生前一番好きだった花を手向ける、見知らぬ青年の姿があった。ああ、めづらかな土地、北大荒よ。

今夜有暴風雪 (約十一万字)

1979年春、旧正月が過ぎても東北松嫩高原は厳寒の日々が続いていた。黒河から嫩江に向っている長距離バスが、突然多数の青年達に急停車を余儀なくされる。北大荒に下放されて、移動の自由を奪われていた四十余万の青年達が、集団で都市——自分達の家に戻るためである。その夜天気予報は「気温は零下二十四度、シベリア寒波の影響で暴風雪が来襲するから、厳重注意を」と呼びかけていた。

東北の北辺駝峰山上では、黒龍江省生産建設兵団所属の裴曉蕓が、はじめての辺境守備についていた。その日は彼女の誕生日、二十七年前の今夜、大学の哲学教師と声楽家の両親の許に生を享け、引きかえに母は世を去った。やがて文革中に反動教師として迫害されて父も死に、孤児となった上海の娘は、ここに来た時十六才、団では最年少で非力、出身成份も悪いため共産青年団にも加入を許されず、銃を持って歩哨に立つ名誉もずっと与えられずにいた。そして十年、寒さに震えながら皎々とした月明りで腕時計を見ると九時、彼女が世に生れ出た神聖な時間だ。ポケットから取り出した母の写真に「お母さん、私とうとう戦士になれたのよ、やっと皆に信頼されたの」と呼びかける。そろそろ交代の時間だが、人の気配もない。

全団各連隊の長と指導員が、団の会議室で緊急会議を開いている。兵団総本部から緊急連絡が入り、「親許や友人からの知らせにより各地で青年達が帰郷を開始しているが、大事な春耕を前にして農作業に支障を来さないよう、都市に戻る青年達の手続きは三日間に限定し、期間を過ぎた分は凍結すること」と言ってくる。この団の八百余名の手続きを三日間で済ませなければ、青年達は永久にこの地に釘付けされてしまうのだ。

団長の馬崇漢はこの通知を握り潰そうとし、農場幹部で政治委員の孫国泰は「われわれにはその権利はない」と断固反対する。馬団長は功を立てようと焦るあまり、これまでも苛酷なやり方で青年達の恨みを買っており、孫政治委員ともしっくりいっていない。馬団長の意を受け、指導員の鄭亜茹が立ち上り馬団長支持を表明した時、連隊長曹鉄強は「彼女は個人の意見を表明したに過ぎず、隊全体を代表していない」と反対する。曹鉄強は、初期北大荒開発隊指導者で犠牲になった烈士の遺児で、北大荒には特別の思い入れがあり、弱い立場の者を庇う好青年、かつて

の同級生でもある鄭亜茹は彼に思いを寄せ、彼も美しい亜茹に一時的に魅かれたのだが、打算的な彼女の言動に失望し、次第に裴曉蕓の方に心が傾き、今夜はつきり曉蕓に自分の気持ちを打ち明けようと決心しており、会議で激論中も初めて歩哨に立った曉蕓を気遣っていた。

会議室は突然、たいまつを持った全隊員に囲まれているのを発見する。秘密会議の開催はどこからかもれたらしい。会議の結果を注視する青年達は、荒れ狂う大雪になっても隊に戻らず、夜の更けるに従いあちこちで混乱が起き、放火騒ぎがあり、曹鉄強達数名は心死で青年達を説得し、事態の沈静化につとめるが、騒ぎに乗じて団のお金を盗もうとした男を阻止しようとして、曹鉄強の親友劉邁克がその男に刺し殺される。

夫が殺された頃、劉邁克の身重の妻は、仲よしの裴曉蕓が可愛がっている黒犬の異様な態度に不吉な予感がし、馬を引き出し後をつけていくと、交代が来ないままに歩哨を続けていた裴曉蕓が凍死していた。ショックで彼女は流産する。

老政治委員孫国泰の決断で八百余名全員の帰宅手続きが終り、兵団解散の前に、劉邁克と裴曉蕓の団葬が行われる。鄭亜茹は、「秘密会議の内容をもらしたのも、嫉妬のあまり裴曉蕓の交代要員を指名しておかなかったのも自分だ」と曹鉄強に告白し、葬儀を避け、青年期の貴重な十年を過した北大荒から、何も得ることなく立ち去って行く。

曹鉄強は両親の後を継ぎ、北大荒に骨を埋める決心をする。

この二作は、リアリズム作家といわれている作者の、北大荒での体験が土台になっているのは疑いないし、描かれている事柄は実体験かどうかまでは分らないが、当時下放させられた青年達の間でこのような悲劇は無数に起ったと推察できるし、当時の中国人なら誰でも、身近でこれに類する事件のいくつかは見聞きしているはずであるから、完全な虚構とは思えない。現在の視点から見れば、李曉燕、ムーア人、裴曉蕓達の愚直さが何とも痛ましいけれども、当時の彼らが心から信じていたものに殉じた潔さ、自己犠牲の精神は胸を打つ。そして閉ざされた世界であることも知らずに、ひたすら国家の将来を信じて献身した青年達の存在を悼む気持ちが、作者は表立ってなにつ言及していないにもかかわらず、政治に利用され、国家に殺された青年の側からの、犬死させられたとしかいいようのない批判を、読者の心に呼び起さずにいない。その意味で作者は確かに「時代に対する批判の矛先」を、きちんと向けるべき所に向けている。しかしその向け方にはまだまだ甘さがあったことが、つぎに紹介する「父親」から見てとれる。

父 親 （約二万字）

これも自伝に近いと思われる「私」の生い立ちと、父親との関係が描かれている。

父は無学で頑固、体力のみを資本に五十数才で負傷するまで、ほとんど出稼ぎで家を留守にし、節約の限りを盡してお金を残そうとつとめたが、家族数の多さ、それに伴う負担の重さ（父の反対を押しきって大学に入学した兄は、ジレンマから精神を病み、ずっと入院生活を続けているなど）で思うようにいかなかった。私は大学を卒業し世帯を持ち、編集者として働いていた時、父

が上京ししばらく滞在した。ある日父に「なぜ共産党に入党しないのか」とたずねられた私が、名利や虚栄心などを切りすて、真に純粋な気持で入党申請書に記入する難しさを考えて返事できずにいると、「おまえはおまえの父親をばかにしてもいいが、共産党をばかにするのは絶対に許さんぞ！もしおまえが党を信頼できないのなら、以後おれを父親と呼ぶな。党はおれの救いの星だ、今でもおれの身体が丈夫なら、党のために死ぬまで盡すだろう。おまえはちょっとばかり不都合があったからといって、党に対して不満をいう資格があるとでも思っているのか。おまえの受けた苦痛なんぞ、おれが旧社会でなめた苦しみに比べりゃ、屁みたいなもんじゃないか」(P389)といわれ、返す言葉もみつからない。

この場面がこの作品の山で、前半に描かれている父親像と比べると、唐突の感がなきにしも非ずだが、六才の時から地主の家でこき使われたという父親のこういう台詞を読んで、84年、作品発表当時の中国の読者が、全員内心深く頷くところがあったのかどうか不明だが、文化大革命を乗りきり、'89天安門事件にはまだ間があった、四人組以後の党に、また、というかまだ、というか期待があった時代の共感を得たのかもしれない。しかしこの父親、あるいは前出の李曉燕や裴曉蕓達に支持されていた中国共産党の強さ、弱さもまた同時に見えてきてならない。つまり盲目的な、過去のより低い水準との比較による支持は信仰に近いから、その意味では強いが、広い知識、視野、同時代の諸外国との比較による選択の中で勝ち得た支持でなしに、唯一絶対のものとして、謂わば迫いこまれた形での支持は、状況の変化、中国に関していえば、鎖国が解かれて周囲への視界が開かれた時、当然無知を余儀なくされていたことへの怒りに変る部分があるだろう。日本人にも経験のあることだ。だが、作者の矛先はそこまで向いていない。ここに「浮城」を解読する鍵があるように思われる。ただ、自分達は青春を賭けて一生懸命にやったのだ、「父親」の言葉にある「ちょっとばかりの不都合があったからといって、党に対し……」というようにくくってしまうことが、党の持つ本質的、根本的誤りを、すべて四人組かあるいはその時々誤った路線と称するもののせいにすり替えるのを許してきた原因を作り、'89天安門事件を発生させる素地を作ったのではあるまいか。

四.

作者はブラックユーモアというジャンルをあまり買っていないようであるが、浮城はこのジャンルに属するのではないかと一読後考えた。しかし考えを進めていくうちに以下の結論に達した。浮城はSF仕立ての暗喩で、現在の中国そのものを描いているのだと。だから本国からの救いなど期待しようがないし、あるはずがないのだ。

三. でとりあげた三作が、作者の体験と、国家あるいは党に対する信頼に裏打ちされたものであったが故に、明確な文体とある種の感動を読者に感じさせたのに対し、浮城を覆っているのは失望であり、絶望であり、嘲笑である。作者の創作三原則①平和主義、②人道精神、③平民思想のうちの①も②も、完全にないがしろにされている。従って読後感も不快、文体は晦渋なのであ

ろう。浮城を世に問うに至った作者の心境の変化が奈辺にあったか、いうまでもなく89年天安門事件及びそれに続く中国の現状である。

訪れるごとに、大都会及び大都会近郊の農村が豊かになっていくのが、確実に見てとれ、それは一時代前の貧しさこそ善とする風潮より、ずっと慶賀すべき状態であるが、正比例して人々のモラルは低下し、自分さえよければの利己主義と拝金主義が蔓延し、青年達は外国（理想はアメリカ、次善は止むなく日本）へ逃れることを夢見て狂奔し、また搾取からの解放をうたって政權を握った政治自体が、農民からの収奪機構となり果てている。人々はもう政府を信頼せずに「上に政策あれば、下に対策あり」とうそぶいて、結構好き勝手にやり出したところが、都市及びその近効は暮し向きが向上した反面、食べられない内陸部の農村は盲流（流民）となり、大きな社会問題となってきた。それでも革命第一世代は、旧社会と比べればという点に慰めを見出しているのかもしれないが、そうは思わない世代の方が、時と共に増加する一方なのだ。

浮城の作者梁曉声は四十代なかば、経済に無知だった毛沢東の失政により、学業途中で農村に下放という形で口べらしに追いやられた彼ら文革世代は、いまや中国社会の中堅となっている。彼らは屈折した世代で、'89天安門事件に際しても、青年達のように軽はずみな行動はしなかったと聞かすが、自らの血と汗で購った醒めた目で、事態をじっと見つめていたのは確かである。そして政府の対応に失望し、*相楊氏のいうところの漬物がめ——中に入る物すべてをくさらせる中国——、革命家は皇帝になり、人民は常に騙され収奪される側を逃れることのできない中国に絶望したのではあるまいか。浮城は、たとえ国家権力の支配を逃れ出ても、その機を生かすことができず、小世界の中でも四分五裂し、権力闘争を始め、弱肉強食を展開してしまう。中国人自身が内蔵するおぞましさを描いたという点では、前出の作者の言である「時代に対する批判の矛先」は、するどさを増していると思えるし、'89天安門事件以後筆を絶っている作家も多いなかで、健闘する作者に、今後一層期待したい。浮城の沈没が、中国の国威の沈没であってはならないように。

* 柏楊作家。評論家。1920年河北省生れ、東北大学（四川省）卒。1949年台湾に行き成功大学教授を経て文筆活動に入るが1968年筆禍事件で逮捕され10年間獄中生活を送る。代表作に「丑陋的中国人」などがある。

引 用 作 品

- | | | |
|-----------|----------------------|--------------------------------|
| 浮 城 | 花城出版社 | 1992年10月第一版 |
| 這是一片神奇的土地 | 1982年全国優秀短篇小說評選推獎作品集 | 中国作家協會編
上海文芸出版社 1983年8月第一版 |
| 今夜有暴風雪 | 1983年中篇小說選 第二輯 | 人民文学出版社 1984年7月北京第一版 |
| 父 親 | 1984年全国優秀短篇小說評選推獎作品集 | 中国作家協會編
作家出版社 1985年10月北京第一版 |
| 当代中国作家百人傳 | 求实出版社 | 1989年6月第一版 |

(平成5年9月13日受理)